

『デーミアン』の、ヘッセにおける意義

藤井啓行

小説『デーミアン』(一九一九)は、ヘルマン・ヘッセが、過ぐる第一次世界大戦(一九一四—一九一八)によって全く失ってしまった魂の支柱を再び打樹てようとの悲願をこめて世におくったもので、作者四十二才のときの作品だが、重大な問題を孕んでいるように私には思われる。

ヘッセはこの作品の序文において次のように述べている。「すべて人間の生活は、自分自身への道であり、一つの道を試みることであり、一つの小路を暗示することである。いかなる人間もかつて完全に自分自身であつたためしはない。しかしそうならうとみんなは努めている。ある者は漠然と、ある者はより明確に。めいめい力に応じて。」(十二頁)この言葉はそのまま、『デーミアン』を書き始めるに当つての、作者の意欲・決意に繋がるものであろう。すなわちそれは、己れの全力をあげて自我探求の道をつきつめるという方向にはかならない。

『デーミアン』は、第一次大戦直後発表——脱稿は大戦終結の前年一九一七年——された当時、混乱、虚脱の状態にあつたドイツの青年たちに対して特に大きな衝撃を与えたものであつた。しかもま

たヘッセの作品系列における、いわゆる前・後期の分水嶺として、作者自身にとつても、一つの転機を劃した小説であるとされている。ここにあらわれているのはすなわち、前述の如く、自我を追求する一筋道である。しかし言うまでもないことだが、それはこの作品において全く突発的に起つた、などというようには考えられない。いやむしろこの道は、私見を以てすれば、程度の差こそあれ、実はヘッセの、作家としての出発点より始まっているとすべきものなので。

この点をまず、それまでの小説作品の主要な系列の上に概略眺めてみよう。ヘッセの魂は、実は不安と内面的充実とに促される冒險的なものだが、既に処女作『ヘルマン・ラウシャー』(一九〇二)においても、彼の作品の、言わば主導樂句たるべき「アポロ的なもの」と「ディオニソス的なもの」との並存・対立、ならびに両者の止揚への憧憬が明らかに見られたのであつた。また『ペーター・カールメンツィント』(一九〇四)にあつては、自然感情の深さが遺憾なく示されるとともに、内的世界への素朴な反省が全篇に息づいていたが、次の『車輪の下』(一九〇六)から『ゲルトルト』(一九

一〇)あたりまでは、ゴットフリート・ケーラーに通ずる意味で、作風において、より着実な方向に向つてきたことを思わせる。

さらに『ロスハルデ』(一九一四)は、ヘッセの初期の作品系列において大きな意義をもつものと言つてよい。それは、この作家には珍しい立体的な構成や簡潔にして男性的な描写手法にも窺われるところだが、とりわけ『デーミアン』にも繋がるその心理解剖の鋭さにおいて注目に値するのである。

このようにして、ヘッセの社会的声価は確乎たるものとなつてきた。しかしここで看過してならぬことは、結婚して定住し名声を獲得した彼も、他面では実はやはり反市民的であり、自然に深く憧れるてゐの、依然たる人生の局外者であつたことだ。それは直接彼の作品に深く立到れば直ちに分ることだが、またとりわけ、当時のヘッセの心境を知る上に恰好の隨筆集『ビルダーブーフ』(一九二六)の中に端的にあらわれているところである。その中の一文に、彼が結婚の翌年ボーデン湖畔ガイエンホーフェンに居を構えて移り住んだ年(一九〇七)の記録として『菩提樹の花』というのがあるが、そこには次のような一節が見られる。「おゝ、君たち旅する若者らよ、君たちのびのびと愉しげに歩く者よ。たとえ私が五ペニヒの銅貨を恵んでやるのだとしても、君たちの誰をも、王者を見送るようにな、心からの尊敬と讚美と羨望とを以て私は見送る。君たちの誰もが、最も落ちぶれた者でさえ、目に見えぬ王冠を頭に戴いている。君たちの誰もが幸福な人間であり、征服者である。私も君たちと同じ時代があつた。そして、さすらいや異郷がどんな感じのものかを知っている。郷愁や欠乏や不安に苦しみながらも、それは全く甘美

なものなのだ。」⁽²⁾

こうした憧憬に駆られている彼が、市民的でいわゆる平穩な家庭生活において、十分満足を感じたこととは考え難い。そしてこのような憧れとの関連からも、『クヌルプ』(一九一五)の出現は極めて自然であると言える。これは、言わば現実生活における一人の局外者の、典型的な漂泊の文学である。ここでは人間の魂を凝視する作者の極度に鋭いまなこが、自然や生物に対するしみじみした観察と相俟つて、その内省の「美しさ」は、この作品に一段の深さを湛えしめている。

ところで「アポロ的なもの」と「ディオニソス的なもの」との対立・相剋は、宿命的な本質として、ヘッセの生涯を通じて盡きないものではあつた。しかしこれまででは、「平和な」家庭生活と世間の名声との間にあつて、少なくとも実生活上表面的には、彼にとつて一応の調和がとれているようにも見えていた。だが他方、精神上的の危機が次第に内攻してきていたことは見逃すことができない。すなわち、たとえ先に引用した放浪者に寄せるはげしい郷愁などは、ディオニソス的なものの一つのあらわれと考へてよからうが、それら内心の憧憬と市民的ないわゆる平和との間に板ばさみとなり、こうした紛糾の醸し出す重圧感によつて彼は次第に一種のノイローゼに取り憑かれ始め、その苦しさは内心深く喘いでいたのであつた。そしてついに彼は自他の間に繋がりを見失ひ、自己の絶対的孤立という觀念にも捉えられようとする危険にすら直面した。ここに、フーゴ・バルも指摘するように、自他の間に掛橋を渡そうとして、彼は努力したわけである。こうしたきびしい孤独の相を、我々は

『ロスハルデ』、『クヌルプ』その他にもはつきりと見る事ができるのだ。作家としての外見上の華やかさに反して、内的には彼の極度の不安に悩まされていた、と言つてよい。そしてこのことについての彼の強烈な自我意識が、第一次大戦を境としてついに爆発したと考えられるのである。この点に關してはさらに、夫人との年来の家庭的な不和、父の死、愛児の重病等々といった、さまざまの不利な条件も、あわせて考慮に入れなければならないのだが。

この間の事情については、ヘッセが四十八才のとき發表した自伝的な素描『短い履歴』によつても、おおよそ知ることが出来る。すなわち、作家としての成功と世間の好評が「快感」と「満足」とを齎し、彼は世間と「平和に」暮したのもあつたが、大戦を契機として事情は一変し、それらの平和も幸福も、実は非常に不安定な地盤の上に立つていたことが分つたのである。世界には、殺戮の手段は知つていても、魂の救いということについて心得ている人は、いかに少ないことであろうか。彼の悩みははげしかった。狭いドイツ氣質よりもまず人間性を思う人として、また愛をたたえるヒューマニストとして、いかにして周囲の血の愚行に同調することができたであろう。しかしながら、ここで特にわれわれの注意を促すのは、そこに深い内省が伴つたことである。そのような蠢行を非難する権利は人間にも神にもなく、ましてや自分にはない、と彼は考える。彼としても、救いへの道を敢然と歩まなかつたことによつて、多かれ少なかれ世界のこの混乱と罪に關与してきた、とするのである。そのことをつきつめようとして、彼は全く自らの内面に、自己の運命の中に沈潜した。同時にそれは人類の運命全体に繋がるもの

だという思いをしばしば抱きつつ。ヘッセは『短い履歴』の中で述べている。「私は世界の一切の戦争と殺意、一切の軽はずみと粗野な享樂慾と臆病さとを自分自身のうちに再発見した。そしてまず自分自身に對する尊敬を、それから自分自身への輕蔑の氣持を失わねばならなかつた。混沌のかなたに再び自然と純真さを見いだす希望が、しばしば燃えあがりしばしば消えるのだったが、混沌への擬視をつきつめることに専念した。」このことと関連して、『ドイツ青年に与える言葉』という副題のついた『ツアラトゥストラの再帰』(一九一九)の中においても(『ドイツ人について』)、ヘッセはドイツの青年たちに対して、「諸君は不実であつた。諸君自身に對して不実であつた。そして、これだけが諸君に世界の憎惡を招いたものである」と、予言者にして指導者たるツアラトゥストラに語らしめてゐる。そしてこうした氣持からこそ、『デーミアン』のあの序文の言葉も生まれてきたのである。

『デーミアン』は、ヘッセがウィーン派の性愛分析的な深層心理学を積極的に手法として取り入れたものであつて、その点、それまでのドイツ文学史の上で特異の作品だとされている。(フーゴー・パウル)そしてここでは、自然界のあらゆる力の(中でも人間の魂が最も強力かつ危険なものだという、精神分析学によつて強調された認識が、すこぶる明確に裏附けられているのである。魂の解明という問題において占める「無意識的なもの」の位置の重要さについては、ヘッセも夙に注目するところであつたが、フロイト一派、殊にラング博士の所説に接して強く刺戟された彼は、『デーミアン』において、まさにこの無意識的なものの、言いかえれば潜在意識の分析

により、ある人間の魂の発展を描こうとしたわけである。この作品の中に出てくるさまざまな夢の現象も、実は右の学説において重要な役割をつとめているものであることは周知のところであらう。

X

X

この小説は、戦場で今や死の床にある一兵士エーミール・シンクレアが、その短い生涯を回想してそれを告白するという形式をとっている。

シンクレアは、ラテン語学校へ通っていたまだ十才のころからしてすでに、明暗二つの世界の間の対立・矛盾のまつただ中に投げ入れられていた。一方には平和で美しく整頓された両親の世界があったが、他方では、いま一つの世界がこれと深く交錯していたのだ。それは卑猥な女中や若い職人たちの蠢く暗い世界である。第一の世界に平和を見いだす少年エーミールに最初の不幸を齎したのは、第二の暗い世界を代表する年上の不良少年フランツ・クロマーで、これが悪^{アルヒヒューズ}の古態型としてあらわれる。シンクレアがこの不良少年に睨^{ヒツ}られまいとして、自分だつて大胆な泥棒をしたことがあると、心にもない嘘を言ったことが悲劇の発端となり、彼は脅迫され盗みを強いられて、一歩々々泥沼の世界へ引きずりこまれてゆく。真に自分自身になるといふのは、最も容易なようで実は最も困難なことであり、そしてこの自己に忠実でないことが、さまざまな不幸の源となるのである。

ここであらわれたのが、シンクレアの生涯の友、若きデーミアンである。彼はシンクレアより年長で、その特異性の故にすこぶる注

目を惹く少年であつた。「彼の眼は子供には決して好かれぬ大人のような表情をもち、その中にはいくらかの悲しみをうかべつつ、嘲笑の光を宿していた。」(四二頁)デーミアンは、聖書の中に出てくる、かのアベルを殺したカインの物語に大胆な解釈を下して、独自の世界を示す。実はカインこそ非凡人、創造者とも見られるのであつて、臆病な人たちはこの豪胆な精神に耐えることができなかったのだ、彼らにとつては不気味なカインに兄弟殺しの作り話をくつつけたのだ、ところで自分もシンクレアもこのカインの額にある標をつけている、そしてこの標はなんら恥ではなく、それは表彰なのだ、というのである。シンクレアは結局同意を示しつつ、それを実は自らの内面からの声としても聞くのだった。

ところでこの過程において、シンクレアの夢の中にクロマーがあらわれ、彼の手に匕^ヒを握らせて、それで父を刺せという。暗い世界に引きずられてゆくシンクレアにとつて、その精神上の解放の妨げになるのは父だからである。(フロイトによれば、意識下に抑圧され、排出口を求めてなんらかの形で外にあらわれようとする精神群、すなわち潜在意識の一つの象徴が夢である) こうした迫害と強圧との同じ夢の中に突然出現したのは、かのデーミアンであつた。この出現は不安とともに歓喜をも齎す。シンクレアが現在のがれたいと願う暗い激情の化身がクロマーだとすれば、デーミアンは創造的な欲求の力を示すもので、それに従うことはなんら罪を意味しないのである。

こうしたデーミアンの力でやがてクロマーの脅迫から遠ざかることになつても、シンクレアはもはや驚きはしない。すなわち、こ

ここで彼はデーミアンという媒介によつてはじめて自己に目覚めたのだと言ふことができる。しかもまた、こうしてクロマーによる危険が完全に去つたとき、シンクレアは、さらにデーミアンをもその意識の中から払いのけて、再び「明るい」両親の世界へ戻つてゆくことになるのだつた。

まもなく第二の危機がやつてくる。すなわち性的問題だ。彼はこの衝動を禁断の狂暴な力だと考へて悩むのである。この場合も、結局シンクレアに救いへの言葉を投げかけたのはデーミアンだつた。デーミアンは次のように述べる。「彼らは神をすべての生命の父と讃えているくせに、すべての生命の基をなす性生活の全部を無造作に黙殺し、そしてややもすれば、それを悪魔のしわざであり罪惡であるなどと言つている！……だが僕たちは、すべてのものを崇拜し神聖視しなければならぬと思う。全世界をだ。この人工的に区分された、公式的の半分だけでなく！ こうして僕たちは、神にかえると同時にまた悪魔につかえなければならぬ。それでこそ正しいと思う。だがそれよりも僕たちは、悪魔をも自分の中に含むところの神を造らねばならぬんだと思う。この世の中で一番自然なことがらが行われても、その神に対して眼を閉じなくてもいいような神をね。」（八六一―八七頁）

こうした魂の新生についての考への大胆さを効果づけるため、作者はわれわれに、全く自分自身の中に沈潜して無我の状態におちいつたデーミアンと、その姿にうたれるシンクレアの有様を描いてみせる。デーミアン——内的に解放された新しい人間の指導者——は、宗教とエロスとの間の近代的な軋轢を超克したものと見える。

そのさいこの無我の状態が注意を惹くが、このような宗教性の中には、エロスが強く鼓動し脈うっているのである。

再び年は経過し、デーミアンはまた遠ざかつてゆく。そしてシンクレアには第三の危機がおとずれる。今やギムナジウムの少年塾にはいつた彼は、内面への道にいつそう立ち入つてゆこうと思いつつも、実際は、慚愧の念に苦しみながら酒に溺れ放埒に耽るのである。ここで「慚愧の念に苦しみながら」と言つたが、前述の二度の危機に際し、彼は内面よりの声として一時たしかに己れの内なるディオニソスのなものを深く肯定したのだが、やはりその肯定は、実を言つと、彼にとつてまだ心の奥底からのものとはなつていなかったのであろう。新しい事態が生ずることに、彼は混乱し苦しまざるをえない。すなわち彼は、依然として「暗い世界」を本能的に惡とする想念からいまだ十分に抜けきれず、そこに沈みつつも、「明るい世界」に常に強く憧れているわけである。

この危機は結局、一人の少女によつて救いへの道を開かれることになつてゐる。彼はこの少女を、かのダンテにならばアトリーチエと名附けて、その本質を現実には全く知る由もなく、言葉一つ交したことがすらない彼女に対し、ただ心の中でひたすら甘美な愛と崇拜とを捧げる。そして彼の内に芸術家意識が目覚め、彼はこの少女の姿を絵筆で定着しようとする。しかもこの姿を描いているうちに、それはいつしか自らのデーモンの永遠の像となり、またデーミアンの相を帯びるにいたるのである。こうした意味でベアトリーチエは「永遠なる女性」と言つてよく、その本質は、ひつきよう相手の男性すなわちシンクレアの人格の反映により、シンクレアの主観

においてこそ絶対的な価値をもつものであり、内面的、自発的な均齊作用の、言わば詩的象徴とも見ることができようであろう。要するに放埒というのも、ディオニソスのなものの一つのいびつなあらわれと考えられるが、そのただ中であつて、いかなる衝動や欲求よりもこの際の彼にとつてさらに深くはげしい畏敬の念と礼拝とを捧ぐべき対象を、ペアトリーチエという少女において認めることが救いになつたと考えてよい。

ここでシンクレアはまたはげしい夢におそわれ、この夢の中で、デーミアンによつて、生家の玄関の扉の上にあるはいたかの紋章を食べさせられる。そしてこの鳥を呑みこむやいなや、鳥は彼の体内で動き出し、中から彼のからだを喰ひ破り始める。死の恐怖におののきながら目覚めた彼は、このはいたかの絵を描いて、それを別れたデーミアンのもとに送るのだった。(この夢の解明は簡単である。このはいたかは「カイン」に通ずる象徴的なもので、また同時に、讖関のところまで上つてきているリビドなのだ。この鳥がシンクレアのからだを喰ひ破るのは、彼がまだ自分の讖関下の世界を十分に肯定することを、敢えてなしえぬからである。)

デーミアンは、それに対して、シンクレアに次のような注目すべき言葉を書き送っている。「鳥は卵から脱け出ようと腕く。卵は世界だ。生まれ出ようと欲するものは、一つの世界を破壊せねばならぬ。鳥は神にむかつて飛ぶ。神の名はアブラクサスという。」(二五—二六頁)

Der Vogel kämpft sich aus dem Ei. Das Ei ist die Welt.

Wer geboren werden will, muß eine Welt zerstören. Der Vogel

fliegt zu Gott. Der Gott heißt Abraxas.

ヘッセは、ニーチエとならんでまたドストエーフスキイにも強く惹かれており、随想集『ペトラハトゥンゲン』の中の『カラマーゾフ兄弟、ヨーロッパの没落』(一九一九)において、実にドストエーフスキイこそ、ゲーテやニーチエにもまして現代のヨーロッパ人の運命に対し決定的な意味をもつ所以を強調している。そして、カラマーゾフの理想、すなわち太古のアジア的な神秘の理想がヨーロッパを支配し始め、現代のヨーロッパ文明に「没落」を齎しつつある、この「没落」は人類の源流たるアジアへの復帰であつて、それは人類を一つの新しい生誕に導くだろうとし、しかもこの現象を没落と感ずるのはただ古い世代だけで、青年たちはそこにひたすら新しい未来を望み見るのだ、という意味のことを述べている。さきに引用したデーミアンの言葉もこの点に関連して意義の深いものがあり、「アブラクサス」なる言葉にも、そうしたことを結び合せて考えてみる必要があらう。

シンクレアの夢の中で、この神の姿は母、ならびにデーミアンの相を帯びてあらわれてくる。しかもそれは、力強く、いまだかつて見たこともないような女性的な姿であつた。この人物が彼に深く、おそろしい愛の抱擁をし、彼は恐怖とともに、いまままでに知らぬ愛の歓喜を覚えるのである。そしてこの夢の中の恋人は以後くりかえしあらわれてくるのだが、それは聖母であるとともに、また娼婦でもあるのだつた。

次にシンクレアは、孤独な音楽家ピストリウスと一時知り合い

になつたが、そのデモーニッシュな言葉はシンクレアにとつて、遠く離れているデーミアンの教えとの深い一致を思わせるもので、デーミアンに示唆された観念が一そう深められてゆく。こうして今や彼には内面の世界のみが唯一の現実で、外界は、言わば単なる虚構の世界にすぎぬものとなり、「どこに達しようと思ひに介せず、自己の道をさぐって進む」(一七四頁)というその道をいつそう前進するようになってゆくのだつた。

ここで不幸な学友クナウエルがシンクレアにかかりをもつてくると、この少年は迫りくる性の衝動をもてあまして、その罪の意識に苦しめられており、シンクレアによつて救われることを期待しているのである。しかしシンクレアは適切な救いを与えることができず、ただ内面への道を進むようにと言つてやるのみで、この不遇な少年に、結果として彼に対する幻滅と憎しみを覚えさせるだけであつた。

さてクナウエルに対する同情と嫌悪の気持ちにみちたまま、その日シンクレアが眠ると、例のあの見知らぬ女の顔かたちが夢の中にまたまざまざとあらわれたので、その像を描き、彼はそれをアブラクサスとよんだ。数日後再びシンクレアは夢を見るのだが、夢うつつの中に、この肖像画を焼き、その灰を食べてしまふ。(ここに意識と無意識的なものとは一つになり、アブラクサスはもはや外部に存在するものではなくして、それはシンクレアの内部にはいつてしまつたのだと解することができると)かくて夢より醒めたとき、シンクレアは「神」にみたされたものとなり、この彼の力によつて、ついに破滅に瀕せるクナウエルも、その絶望的な苦しみから脱すること

ができるのである。

さてピストーリウスは、いかにもシンクレアにとつて魂の医者でありまた助言者でもあつたが、また他方ではひたすら過去の探究に耽る「うしろむき」のひとで、従つてまもなくシンクレアはこの友人のもとを去らざるをえなくなり、こうして彼は今や全く孤独になつた。そしてここでデーミアンとの最後の邂逅にむかうこととなる。

ギムナジウムをおえて、シンクレアはある大学都市へ遊学にむかう。彼はそこで再びデーミアンに会い、またデーミアンの母、これまでの夢想の化身たるエヴァ夫人に遭遇する。そして彼は夫人の中にこれまでの夢の最大の充足を見いだすわけである。彼女は「その息子に似て、ほとんど男のような大きな女の姿、母らしい表情、きびしい表情をもち、深い情熱に溢れ、美しく魅惑的で、美しく近づきがたく、魔精にして母性、運命にして同時に恋人」(一七八頁)であつて、それはシンクレアの魂をはげしくかきたてるものだつた。

die große, fast männliche Frauenfigur, ihrem Sohne ähnlich, mit Zügen von Mütterlichkeit, Zügen von Strenge, Zügen von tiefer Leidenschaft, schön und verlockend, schön und unnahbar, Dämon und Mutter, Schicksal und Geliebte

そしてシンクレアにとつて、「彼女のそばに居ることは、愛の幸福であり、彼女の眼差は成就であつた。」(二一八頁)

エヴァに対する愛は、シンクレアにとって生活の唯一の内容であるように思われたのだが、しかも、それについて彼は次のように述べている。「ときどき私は、次のことをはつきりと感じるように思つた。すなわち、自分の本性が引きつけられてめざす対象としてゐるのは、彼女個人ではなくて、彼女は私の心の象徴にすぎず、それは私を私自身の内部へひたすらより深く導こうとしてゐるのだ。」(二〇三頁) すなわち、シンクレアの自我とエヴァは、その本質において同一の存在とも見てよいわけであり、シンクレアが真の自我に迫るにしたがつて、それはデーミアンの相を帯び、さらにエヴァに通じるものともなるのである。

男性の、救済に対する憧憬の目標であるエヴァの姿を胸に宿しつつ、シンクレアはデーミアンと交遊を続ける。この交遊の中にあつて、彼は、騒然として今にも爆發せんとする時代の気分を理解し、古い世界の没落と新しい世界の生誕とを予感する。孤独の予感の中で再びはげしく燃え上つた愛のうちに、シンクレアはフラウ・エヴァをよび、彼女は自分を求めるそのよび声を聞いたが、彼のもとに寄せられたのは、エヴァの息子デーミアンであつた。

デーミアンは大戦の勃発を報らせてくる。そして、数々のいましめを受けて今や危殆に瀕せるヨーロッパの、新しい創造への歩みを重視する二人の若者は戦地に赴き、シンクレアは戦場で数限りない死の実相に触れた。しかし彼は、その流血も、ただ新たに生まれ出ることができるとともに、殺戮し、また自らも死のうと欲するところの、内面において分裂せる魂の放射にすぎぬと感ずるのだった。死もまたハウアーアムッターV(人類最初の母イヴ)への魂の導き手

以外のなにもでもない。戦場の孤独の中で、彼はまたエヴァをよぶ。すると彼女の額からは無数の星が飛び出して、歌い始め廻り始め、その星の一つが轟然たる音を発して彼の上に落ちてくる。

深傷を負つてよこたわつたシンクレアは、かたわらで、臨終の床にあるデーミアンが彼に微笑を投げかけているのに気づく。デーミアンからシンクレアに、エヴァのキスがおくられる。

シンクレアの最後の幸福は自己沈潜の中にある。暗い鏡の中で運命の像がまどろんでいる自分自身の内面にすつきりはいつていくとき、彼は今やいつでも、デーミアンにそっくりな自らの姿を見るのだった。シンクレアもこうして、最後には安らぎの光に包まれ、自分を導くものはすなわち窮極において己れ自身であることを感じつつ、人類の出所たるフラウ・エヴァハウアーアムッターの胸に帰っていくわけであらう。

×

×

以上『デーミアン』の世界を概略あつづけてきたわけだが、先にも述べたように、そこまでに至るヘッセの、作家としての精進、力闘が理解される一方、またやはり、その作風の「変貌」はかなりにラジカルな点をもつてゐることを認めざるをえない。そしてこの『デーミアン』をもつてとりわけ強く踏み出された内面への道はその後も進展してゆくのであるが、そのきびしい文学精神にはいかにも嘆ぜぬわけにゆかない。ここで、またその点にこそ『デーミアン』の、ヘッセにおける意義があると言つてしまえば、あまりに早く結論を急ぐことになるが、なおその前に、ヘッセの小説の手法という

ような点についても少々考えてみたいことがある。

ヘッセは『ペトラハトゥンゲン』の中に収められた『選集に対する一詩人の序』（一九二一）と題する一文において次のように述べている。これは、彼の書いたものの中で自ら拾って一般向の選集を作れというさる出版者の勧誘に対し、その選集を編むための観点として、自分には二つの態度が可能である、その一つは、自分の小説を他の、価値の定まった証明済みの作家の作品と比較して、それを自己批判の尺度とすることだ、として、次に続けているところの一節である。すなわち、「第一流、最高の小説家は——言うまでもないことだが——私は問題外とした。私が最も野心に溢れている瞬間でも、自分を、セルヴァンテス、スターン、ドストエーフスキイ、スウィフト、バルザック等と同列に置くことは、思いも及ばなかった。……外見的に言えば、私の長篇小説は、前の時代の作家たちの諸作品と比較できるのである。お互の共通点は、 \wedge 長篇 \vee とか \wedge 小説 \vee とかという書物の扉の表示である。……私の小説は小説ではないのだ。私は小説家ではない。全然小説家ではないのだ。……自我感情及び世界感情を表現しようとする詩的試みに貼りつけた借りもののレットルとしての長篇小説、これこそドイツ文学特有、浪漫主義特有の現象で、この点において私は自分がその血をひき、その罪を共にしている、ことをよく認めたのであった。」（傍点筆者）

ヘッセの小説の手法を考える上において、右の言葉は、そう簡単に片付けてはならぬものをもっているように見える。字面にあらわれているそのままは別としても、少くともその中に含まれている一種自嘲めいた響きだけは、それはそれとして率直に受け取ってゆく

のが、私にはヘッセを読む者の自然なゆきかたに思われる。すなわち、彼の小説は一般に——それは『デーミアン』にも端的にあてはまることだが——あまり小説らしからぬ小説である、と言ってよい。それでは、「小説らしからぬ小説」などという、開き直つてみるときそのこと自体としてはむしろナンセンスとも感じられる点をすら認めながら、この作品がなおわれわれに深い意味において訴えるところをもっているとするのは、何によつてであろうか。

その舞台が「壮大」でもなければ、またその構成があまり「立体的」だとも言えない小説を、おそらく生来の資質から書き続けてきたこの作家は、『デーミアン』において象徴の世界に到達した。この作品全体にあらわれている象徴の意味は重大である。作中の諸人物、諸現象はすべて象徴にまで高められているのだ。描写が外界に向けられたものとすれば、象徴はこれに対して、内面の世界に向けられたものと言うことができよう。言葉は無限のものを有限化する。これに対して象徴は、精神を、所謂現実の境界を越えて無限世界の領域内へと導き入らしめる。それは予感を惹き起すもので、名状しがたきものの標なのである。そして『デーミアン』はこの立場に立つて、自我を求める人間の物語を一つの新しい神話にまで形成した作品であり、マツツイヒの言葉を使えば、「人間の魂における象徴生誕の：一つの芸術的な模写」であるということが出来る。その点においてどれだけ成功しているかについては確言を差し控えたいが、心理分析の鋭さや造形の斬新さは随処に認められるところで、またその言語は強く、夢想的で予感にみちており、告白的な文学のスタイルとして適わしいものであることは、よく理解しうるの

である。

そして右の芸術的卓越を前提として、彼の、作家としての魂の深さ、志向の正しさがわれわれを強く惹きつけるのだと私は考へる。彼によれば、ある魂の發展を描くことが、そのまま全世界を描く道にも通ずるのである。『デーミアン』は一つの大きなよびかけを兼ねた自己告白の書であり、ヘッセが自己の本質を媒介として、危殆に瀕せるヨーロッパ精神を極めて鋭く分析したものと言うことができる。そしてそこには、いわゆるアジア的な理想による救済のイデーもかがわれるのだが、これはヘッセに従えば、あらゆる固定した倫理・道徳から離れることを前提とするものである。この点より見れば、『デーミアン』は従來の、対立・相剋という觀念や小我にあまりに捉われすぎていたヨーロッパ文明の、内部的な崩壊を宣告するものであると言つてよい。すなわち兩極性は世界の本质でありつつ、またその根底には常に統一が存在しているのであつて、従つて対立といつても、それは必然的なものでありながら、また他面において幻覚でもあるわけだ。ヘッセはかくて、世界の多様性を肯定しつつ、しかも他方たえず個性の統一のために苦闘し続けていたわけで、それはすなわち永遠の戦士の姿にはかならぬ。

『デーミアン』は、言わばぎりぎり、いっばいの立場から生まれた作品である。この作品に対しては、「美しさ」と「調和」を失つたと非難する友人たちの言葉もあつた。これに承えてヘッセは言う。「死刑の宣告を受けた者にとって、崩れ落ちる壁の間には生まれ命だけは助かろうと走る人間にとって、美しさとか調和とかが何であらう。とにかく彼にはこれ以外にゆきようがなかつたのだ。彼は妥協を知

らず、ひたすら本然の、内なる自己に生きようとしたわけである。それは自ら求めた苦難の道であつたが、そこから、一度身を捨てきつた果ての、ひるみを知らぬ強さが生まれてきた。こつした意味で、ヘッセの作品系列において『デーミアン』の占める位置は、まことに大きいと言わねばなるまい。

〈註〉

- ① Hermann Hesse : *Damian, Die Geschichte von Emil Sinclair's Jugend* (Suhrkamp Verlag 1949) 以下同。
- ② Bilderbuch, S. 49
- ③ Higo Rall : *Hermann Hesse, sein Leben und sein Werk, 1947.* (mit einem Anhang von Anni Carlsson)
- ④ (Die Neue Rundschau, August 1925, S. 849)
- ⑤ Krieg und Frieden, 1948, S. 158
- ⑥ Richard B. Matzig : *Hermann Hesse, Studien zu Werk und Innenwelt des Dichters, 1947, S. 30*
- ⑦ (Die Neue Rundschau, August 1925, S. 849)
- ⑧ フリードリヒ・ニーチェがすべての芸術のうちにも相反する二つの特性を認め、これをどのように名づけたのは、周知のとおりであらう。
- ⑨ Dr. Lang. 一九一七年、ヘッセは、末子マルチンが危険な病におかされたため、ルーツェルン郊外のゾンマットへ湯治にでかけた。そしてその地でヘッセは、当時三十五才のユング派の精神分析学者たる医師ラングと親交を結び、彼から精神分析に対する知識を得た。

- ㊦ (旧約、創世記第四章) カインはアダムとイヴとの長子。弟アベルの供物が神に嘉納されたのに、自分のはされなかつたため、嫉妬のあまりアベルを殺した、とある。
- ㊧ アブラクサスは、一つの姿の中に「神」と「悪魔」、男と女を兼ね備えた神で、超感覚的な神との融合の体験を可能にするところの神秘的直観を説くかのゲノスチック派に由来するものである。
- ㊨ 「人はみな、人間にむかつての自然の一擲である。我々すべての者の出所、すなわち母は共通である。我々はみな同じ深淵から出ているのだ。」(十三頁)